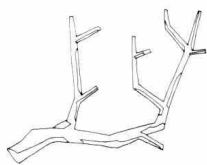


高野聖

泉鏡花



高野聖



泉
鏡花

ほるぶ出版

市古貞次・小田切進 編 日本の文学 8

高野 聖

著 者 泉 鏡花

責任編集 市古貞次（古典編）

小田切進（近代編）

発行日 昭和五十九年八月一日 初版第一刷発行

発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森蒔人

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五四一七〇三（代）

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五六―六二二（代）

製作 東京連合印刷株式会社

印刷 大日本法令印刷株式会社

目次

高野聖

1

歌行燈

113

注

鏡花リバイバルの謎

241 232

佐伯彰一

挿絵一葉

鍋木清方

高
野
聖

第一

「参謀本部編纂の地図を又繰開いて見るでもなからう、と思つたけれども、余りの道じやから、手を触るさへ暑くるしい、旅の法衣の袖をかゝげて、表紙を付けた折本になつてゐるのを引張り出した。

飛驒から信州へ越える深山の間道で、丁度立休らおうという一本の樹立も無い、右も左も山ばかりじゃ、手を伸ばすと達きそうな峯があると、其の峯へ峯が乗り巔が被さつて、飛ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間に唯一人我ばかり、凡そ正午と覺しい極熱の太陽の色も白いは

どに冴^さえ返^{かえ}った光線を、深々と頂^{いた}いた一重の檜^{ひの}笠^{きが}に凌^{しの}いで、恚^こう凶面を見た。」
旅僧は然^そういって、握拳を両方枕^{まくら}に乗せ、其^{それ}で額を支えながら俯向^{うつむ}いた。

道連になつた上人^{しょうにん}は、名古屋から此^この越前敦賀^{えちぜんつるが}の旅籠屋^{はたごや}に来て、今しがた枕に就いた時まで、私^{わたし}が知^しつてゐる限り余り仰向^{あおむ}けになつたことのない、詰^{つま}り傲然^{ごうぜん}として物を見ない質^{たち}の人物である。

一体東海道掛川^{かけがわ}の宿^{しゆく}から同汽車^{おなじ}に乗り組んだと覺^いえて居る、腰掛^{こし}の隅^{ぐう}に頭^こを垂^しれて、死灰^{しかい}の如^{ごと}く控^{くわ}えたから別段目^{べつだん}にも留^とまらなかつた。

尾張^{おわり}の停車場^{ステーション}で他の乗組員は言^い合^あわせたように、不^の残^こ下^ろりたので、函^{はこ}の中^{ちゆう}には唯^{ただ}上人と私と二人になつた。

此の汽車は新橋を昨夜九時半^たに発^はつて、今夕敦賀^{こんせきつるが}に入^いろうという、名古屋では正午^{ひる}だつたから、飯^{ひと}に一折^おの鮎^{すし}を買^かつた。旅僧も私^{わたし}と同^{おな}く其^{その}の鮎^{すし}を求^{もと}めたのであるが、蓋^{ふた}を開^あけると、ばら／＼と海苔^{のり}が懸^かつた、五目飯^{ごもくめし}の下等^かなので。

(やあ、人参と干瓢ばかりだ、)と疎勿ツかしく絶叫した、私の顔を見て旅僧は耐え兼ねたものと見える、吃々と笑い出した、固より二人ばかりなり、知己にはそれから成ったのだが、聞けば之から越前へ行つて、派は違うが永平寺に訪ねるものがある、但し敦賀に一泊とのこと。

若狭へ帰省する私もおなじ処で泊らねばならないのであるから、其処で同行の約束が出来た。

渠は高野山に籍を置くものだといった、年配四十五六、柔和な、何等の奇も見えぬ、可懐い、おとなしやかな風采で、羅紗の角袖の外套を着て、白のふらんねるの襟巻を占め、土耳其形の帽を冠り、毛糸の手袋を箝め、白足袋に、日和下駄で、一見、僧侶よりは世の中の宗匠というものに、其よりも寧ろ俗歟。(お泊りは何方じゃな、)といって聞かれたから、私は一人旅の旅宿の詰らなさを、染々歎息した、第一盆を持って女中が坐睡をする、番頭が空世辞をいう、

廊下を歩行くとじろ／＼目をつける、何よりも最も耐え難いのは晩飯の支度が済むと、忽ち灯を行燈に換えて、薄暗い処でお休みなさいと命令されるが、私は夜が更けるまで寝ることが出来ないから、其間の心持といったらない、殊に此頃の夜は長し、東京を出る時から一晚の泊が気になってならない位、差支えがなくば御僧と御一所に。

快く領いて、北陸地方を行脚の節はいつでも杖を休める香取屋というのがある、旧は一軒の旅店であったが、一人女の評判なのがなくなつてからは看板を外した、けれども昔から懇意な者は断らず留て、老人夫婦が内端に世話をしてく呉れる、宜しくば其へ。其代といいかけて、折を下に置いて、

(御馳走は人参と干瓢ばかりじゃ。)
と呵々と笑つた、慎深そうな打見よりは気の軽い。

第二

岐阜では未だ蒼空が見えたけれども、後は名にし負う北国空、米原、長浜は薄曇、幽に日が射して、寒さが身に染みると思ったが、柳ヶ瀬では雨、汽車の窓が暗くなるに従うて、白いものがちら／＼交つて来た。

(雪ですよ。)

(然ようじやな。) といったばかりで別に氣に留めず、仰いで空を見ようともしない、此時に限らず、賤ヶ岳が、といって古戦場を指した時も、琵琶湖の風景を語った時も、旅僧は唯領いたばかりである。

敦賀で懐毛の立つほど煩わしいのは宿引の悪弊で、其日も期したる如く、汽車を下りると停車場の出口から町端へかけて招きの提灯、印傘の堤を築き、潜抜ける隙もあらず旅人を取囲んで、手ン手に喧しく己が家号を呼立てる、中

にも烈しいのは、素早く手荷物を引手繰って、へい有難う様で、を喰わす、頭痛持は血が上るほど耐え切れないのが、例の下を向いて悠々と小取廻に通抜ける旅僧は、誰も袖を曳かなかったから、幸其後に跟いて町へ入って、吻という息を吐いた。雪は小止なく、今は雨も交らず乾いた軽いのがさら／＼と面を打ち、宵ながら門を鎖した敦賀の町はひっそりして一条二条縦横に、辻の角は広広と、白く積った中を、道の程八町ばかりで、唯ある軒下に辿り着いたのが名指の香取屋。

床にも座敷にも飾といつては無いが、柱立の見事な、畳の堅い、炉の大なる、自在鍵の鯉は鱗が黄金造であるかと思わるる艶を持った、素ばらしい籠を二ツ並べて一斗飯は焚けそうな目覚しい釜の懸った古家で。

亭主は法然天窓、木綿の筒袖の中へ両手の先を窘まして、火鉢の前でも手を出さぬ、ぬうとした親仁、女房の方は愛嬌のある、一寸世辞の可い婆さん、件

の人参にんじんと干瓢かんぴょうの話を旅僧うちだが打出すと、莞爾にこにこ々々笑いながら、縮緬ちりめん雑魚ざぎょと、鰈かれいの干物と、とろろ昆布こぶの味噌汁みそしるとで膳ぜんを出した、物の言振いいぶり取倣とりないなど、如何いかにも、上人しょうにんとは別懇べつこんの間あいだと見えて、連つれの私の居心わたくしの可よさと謂いつたらない。

臆やがて二階ねに寢床どこを慥こしちえてくれた、天井てんじょうは低いうつぱりが、梁ふたかは丸太かえで二抱ふたかもある、屋むねの棟ななめから斜ななめに渡ななめって座敷ひましの果ひましの廂しよの処ところでは天窓あたまに支つかえそうになつて居る、厳がん丈じょうな屋造やづくり、是これなら裏うらの山やまから雪なだれ顔が来きてもびくともせぬ。

特ことに炬燵こたつが出来でて居たから私わたしは其そのまゝ嬉うれしく入いつた。寢床もは最もう一組おなじ同一おなじ炬燵こたつに敷ふいてあつたが、旅僧これは之これには来きらず、横よこに枕まくらを並ならべて、火ひの氣けのない臥ね床どこに寝た。

寝る時し、上人しょうにんは帯とを解とかぬ、勿論もちろん衣服きふも脱ぬがぬ、着きたまゝ丸まるくなつて俯向うつむき形なりに腰こしからすっぽりと入いつて、肩かたに夜具やぐの袖そでを掛かけると手てを突かいて畏かしこまった、其そのの様よう子は我々と反対はんたいで、顔かほに枕まくらをするのである。程ほどなく寂然ひっそりとして寝ねに着ききそう

だから、汽車の中でもくれぐれいったのは此処のこと、私は夜が更けるまで寝ることが出来ない、あわれと思つて最う暫くつきあつて、而して諸国を行脚なすつた内のおもしろい談をといつて打解けて幼らしくねだった。

すると上人は頷いて、私は中年から仰向けに枕に着かぬのが癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼冴えて居る、急に寝着かれないのはお前様と同一であらう。出家のいうことでも教だの、戒だの、説法とばかりは限らぬ、若い、聞かっしゃい、と言つて語り出した。後で聞くと宗門名譽の説教師で、六明寺の宗朝という大和尚であつたそう。

第三

「今に最う一人此処へ来て寝るそうじやが、お前様と同国じやの、若狭の者で塗物の旅商人。いや此の男なぞは若いが感心に実体な好い男。

私が今話の序開をした其の飛驒の山越を遣った時の、麓の茶屋で一所になった富山の売薬という奴あ、けたいの悪い、ねじくした厭な壮校で。

先ずこれから峠に掛ろうという日の、朝早く、尤も先の泊はものゝ三時位には発つて来たので、涼い内に六里ばかり、其の茶屋までのしたのじやが、朝晴でじりく暑いわ。

慾張抜いて大急ぎで歩いたから咽が渴いて為様があるまい、早速茶を飲うと思ふたが、まだ湯が沸いて居らぬという。

何うして其時分じやからというて、滅多に人通のない山道、朝顔の咲いてる内に煙が立つ道理もなし。

床几の前には冷たそうな小流があつたから手桶の水を汲もうとして一寸気がついた。

其というのが、時節柄暑さのため、可恐い悪い病が流行つて、先に通つた辻

などという村は、から一面に石灰だらけじやあるまいか。

（もし、姉さん。）といって茶店の女に、

（此水はこりや井戸のござりますか。）と、極りも悪し、もじく／＼と聞くと
の。

（いんね川のございす。）という、はて面妖なと思った。

（山したの方には大分流行病がございますが、此水は何から、辻の方から流れて来るのではありませんか。）

（然うでねえ。）と女は何気なく答えた、先ず嬉しやと思うと、お聞きなさい
よ。

此処に居て先刻から休すんでござったのが、右の売薬じや。此の又万金丹の下廻と来た日には、御存じの通り、千筋の単衣に小倉の帯、当節は時計を挟んで居ます、脚絆、股引、之は勿論、草鞋かけ、千草木綿の風呂敷包の角ばった

のを首に結ゆわえて、桐油合羽とうゆうがつぱを小さく畳こいんで此奴こいつを真田紐さなだひもで右の包つつみにつけるか、小弁慶こべんけいの木綿こうもりの蝠蝠傘がさを一本、お極きまりだね。一寸見ると、いやどれもこれも克明こくめいで、分別ひろげのありそうな顔ようをして。これが泊とまりに着くと、大形おおがたの浴衣ゆかたに変わかって、帶おび広解ひろげで焼酎しょうちゅうをちびり／＼遣やりながら、旅籠屋はたごやの女のふとった膝ひざへ脛すねを上げようという輩やからじゃ。

(これや、法界坊ほうかいぼう)

なんて、天窓あたまから嘗なめて居ゐら。

(異おつなことをいうようだが何かね世の中の女が出来ねえと相場きまが極きまって、すっぱら坊主やっぱになつて矢張り生命いのちは欲しいのかね、不思議じゃあねえが、争あわれねもんだ、姉さん見ねえ、彼あれで未練みれんのある内うちが可いいじゃあねえか) といつて顔を見合みあわせて二人ふたりで呵から々と笑わらつた。

年紀としは若わかし、お前様まえさん、私は真赤まつかになつた、手に汲くんだ川の水を飲みかねて猶たも